

第31回（2018年度）

学生奨学論文入賞者論文集

大阪経大学会



第31回 (2018年度) 学生奨学論文受賞発表・表彰式 (2018年12月8日)

学生奨学論文 受賞発表・表彰式 風景



第31回（2018年度）学生奨学論文入賞者論文集

目次

1. はじめに	iii
2. 入賞者の声	v
3. 入賞者論文	

入 選

地域プロスポーツクラブ観戦者の集客ターゲット設定に関する研究 —JFL所属クラブ観戦者のサービス評価分析を活用して—	1
	(人間科学部4年) 木戸 俊博
企業と個人SNSアカウント —プライバシーの観点から—	19
	(経営学部3年) 藤岡 拓夢

佳 作

ふるさと納税の要因分析	33
	(経済学部4年) 藤岡 拓也
テキストマイニングを用いた観光地活性化の提言	45
	(経営学部3年) 湯浅寿々丸・笹岡 建吾・高山 美来

努力賞

スポーツダイジェスト番組「熱闘甲子園」のテキスト分析 —テレビは高校野球をどう伝えてきたか—	61
	(人間科学部4年) 篠崎 祐太
AIファンドは通常のファンドを凌駕するか?	77
	(経営学部3年) 河瀬 亜美・藤井 彩花・一ノ瀬沙耶 内本 あみ・林 実来

はじめに

審査委員長 高井 逸史

大阪経済大学では、学術の研究、調査および普及を目的として大阪経大学会を設置しています。この大阪経大学会では、本学の学生の勉学を奨励するため、毎年「学生奨学論文」の募集を行っています。そして、優れた論文を入賞作品として選出し、著者には賞状と副賞を授与しています。入賞の種類としては、特選・入選・佳作そして努力賞があります。特選は、特に優れた論文に対して与えられ、入選は優れた論文、佳作は選にはもれるが優れた論文に与えられています。また、努力賞は、執筆するうえで努力が認められる論文に与えられています。

論文のテーマについては、昨年度に引き続き、応募者が自由に選択する「自由論題」としました。その結果、幅広い分野からの応募があり、学生の自由な発想を垣間見ることができました。本年度は、17編の応募があり、経済学部からは11編、経営学部からは4編、情報社会学部からは0編、人間科学部からは2編の応募がありました。また、学年の割合では、1年生が0編、2年生が0編、3年生が4編、4年生が13編でした。

審査は、今回審査委員長をつとめた人間科学部の高井逸史のほか、経済学部の高橋巨先生、梅村仁先生、斉藤美彦先生、森詩恵先生、塚谷文武先生、水野伸宏先生、経営学部の國友順市先生、石原庸博先生、伊藤正之先生、情報社会学部の伊藤博志先生、加藤千雄先生、人間科学部の土居充夫先生によって行われました。審査委員会において、議論を交えながら厳正な審査を行った結果、本年度は入賞2編、佳作2編、努力賞2編が選ばれました。

第31回を迎えます今回の応募作のテーマについてみますと、SNSをはじめ、AI(人工知能)、IR(カジノ法案)、サッカーなど、平成最後にふさわしい、メディアでよく取り上げられた話題性のあるテーマが散見しました。その一方でふるさと納税やアニメの聖地巡礼、高校野球など、地方を盛り上げる、地方を元気にするテーマが多いのに驚きました。人口が減少し少子化が一層進む中、都市部はまだしも地方においては「限界集落」や「地方消滅」など、否定的な表現が少なくありません。そんな中、奨学論文の多くは、地方のプラス面に焦点を当て論じられています。一見するとどれも身近なテーマですが、ひとつひとつの論文が特色のある地方を様々な角度から記述されています。こうした応募作を読むと、ひょっとしたら学生は無意識に地方へエールを送っているかもしれません。地方を否定的に論じる研究者やメディアの影響をほとんど受けず、学生らしい新鮮な感性で論じられていました。

また4年生のみならず、3年生からの応募もあり、審査において特に考慮したわけではありませんが、結果として3年生の論文も評価されたことは、大変心強い結果であったと思います。ただ受賞発表・授賞式に出席した3年生の論文については、大変残念で悔しい結果となりましたが、来年も挑戦できますから、

ぜひとも一念発起しブラッシュアップし、この悔しさをばねに再度挑戦をしていただきたい。

審査において議論となったことは、論証プロセスの妥当性はもちろん、論文としての最低限の要件とも言うべき、先行研究との関連付けが明確に行われているかという点です。応募作の中には、もう少し自らの研究を先行研究と関連付けて論じ、新規性を主張することができていれば、より高い評価が得られたであろうものもありました。この点は、昨年度から引き続き、学生奨学論文への応募者にとって大きな課題であると感じます。

いずれにせよ、自ら現場に赴いて観察したり、関係する人達にヒアリングをするというフィールドワークが、皆さんの研究をより豊かなものにし、人間性という面でも磨かれていくという効果を生み出すのです。ひいてはそれが、本学の掲げる「人間の実学」の精神を体現することにつながると考えます。

来年はさらに多くの学生から応募があることを期待しております。

2018年12月8日(土)、J館第一会議室において受賞発表・表彰式が行われました。徳永光俊大阪経大学会会長(学長)と田村正晴大樟会会長よりご祝辞をいただき、賞状と副賞、図書カードが贈られました。また、各審査委員からは論文審査の講評をいただきました。その後、記念撮影を行い、入賞者や参加者とともに軽食をとりながら歓談した後、受賞発表・表彰式を終了しました。

入賞者の声



地域プロスポーツクラブ観戦者の集客ターゲット設定に関する研究

—JFL所属クラブ観戦者のサービス評価分析を活用して—

木戸 俊博

(人間科学部4年)

この度は「入選」という素晴らしい賞を頂き、大変嬉しく思います。まさか、自分の論文が賞を頂けるとは思ってもみなかったのが驚きました。論文を書いている過程では、文章で伝える難しさ、分析方法などで大変な部分はありましたが、取り上げた問題について純粋に「明らかにしたい」という気持ちで前向きに取り組んでいたため、最後までやり抜くことができましたと思います。この学生奨学論文に費やした時間は、私自身の中でとても価値のあるものとなり、貴重な時間でした。これから学生奨学論文に挑戦される方も、必ず今後の自分にとって良い経験になると思うので、楽しく前向きに取り組んでみてください。

最後になりましたが、論文を書くにあたりご協力して下さいました田島良輝准教授、ならびに学会関係者の皆様には心より厚く御礼申し上げます。



企業と個人SNSアカウント

—プライバシーの観点から—

藤岡 拓夢

(経営学部3年)

今回、驚くことに入賞することができました。本当にありがとうございます。

僕のテーマについては、本当に些細なものです。「バイト先にラインのアカウントを教えるように言われたが、渡すと自分のアイコン（確かアニメキャラクターでした）を変えないと気まずい」、「就活が近いけど、それで監視されるかもしれないからSNS運用を変えないといけないかもしれない」。この二つ。これがムカつきました。嫌でした。どうして僕のアカウントなのに他の影響でアカウント運営を変える必要があるのか。それは正しいことなのか。それを先生やたくさんの方の力をお借りして形にした所存です。

皆さんも、そんな些細なムカつきが多くあるはずですよ。何故ならこの社会は問題だらけなんですから。論文のテーマなんて聞くと大層に聞こえるかもしれませんが、案外近くにあなたでしか書けないテーマが転がっています。一度それを形にしてみるというのはどうでしょう？僕にとっては素敵な体験でした。



ふるさと納税の要因分析

藤岡 拓也

(経済学部4年)

この度は学生奨学論文にて素晴らしい賞をいただき、大変嬉しく思います。初めての論文であったため、分析過程では思うように進まず苦勞しました。分析結果だけではなく、文章の内容や言葉遣いなど細部のチェックもあり、論文一つ作成することの難しさを感じました。これらすべてを一人で行うことに不安が募りましたが、先生のご指導を受けることで不安は和らぎ最後までやり遂げることが出来たと思います。大変貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



テキストマイニングを用いた観光地活性化の提言

湯浅寿々丸・笹岡 建吾・高山 美来

(経営学部3年)

この度学生奨学論文に挑戦し、佳作を頂くことができました。私たちは論文を執筆することが初めての経験で、所属するゼミナールの尾身准教授や先輩方のお力添えの数々は、私たちの執筆完了への道標となりました。分析手法や論文構成に関しましても、うまくいかない事も多くありましたが、最後までやり遂げることができたことは、安堵の思いが募るばかりです。ご協頂いた尾身准教授を初めとして、チームメンバー、本研究に関わって頂いた全ての方々に感謝の意を表したいと思います。今回の経験を今後の人生に活かし日々精進していく所存であります。論文作成は決して容易なものではありませんが、執筆に際し非常に良い経験が得られます。本学の学生には、学年学部問わず取り組んで欲しいと願っております。



努力賞

スポーツダイジェスト番組「熱闘甲子園」のテキスト分析

—テレビは高校野球をどう伝えてきたか—

篠崎 祐太
(人間科学部4年)

この度は素晴らしい賞を頂き大変嬉しく思います。私自身、論文を執筆するのは初めてで、最初はとても不安でした。先行研究や熱闘甲子園の分析を重ねていく中で、どの作業も膨大な時間がかかり、まとめては修正、また修正と試行錯誤を繰り返し、論文の難しさを痛感しました。しかし、論文のストーリーが見え、それらをまとめられた時は、今までに味わったことがないぐらいの達成感がありました。これから学生奨学論文に挑戦される方も、地道な研究や分析を行うことで、必ず良い論文ができ、その経験は自分の財産になると思います。是非最後まで諦めないで頑張ってください。

最後になりましたが、お忙しい中ご指導いただいた田島良輝准教授、ならびに学会関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

努力賞

AIファンドは通常のファンドを凌駕するか？

河瀬 亜美・藤井 彩花・一ノ瀬沙耶
内本 あみ・林 実来
(経営学部3年)

この度は、「努力賞」という素晴らしい賞をいただき、光栄に思っております。執筆に当たり私たち5人は約半年間、研究に打ち込んでまいりました。AIファンドという現代のテーマは情報が少なく、分析に用いるデータに限りがありました。そのなかで論文を書き上げることができたのは各々が自らの役割を果たした結果であり、共同執筆であったからです。奨学論文を通してチームワークや計画性の大切さを学ぶことができ、挑戦してよかったと思っております。

最後に、お忙しい中審査してくださった学会関係者の皆様、ご指導いただいた先生、先輩方には厚く御礼申し上げます。

